

「誰も羨む江戸のシンデレラ」

増山雄三

今でも、「玉の輿に乗る」という言葉をよく耳にするが、それは、女性が金持ちの男性と結婚し、自分も裕福な立場になることをいい、男性が金持ちの女性と結婚する場合は、「逆玉」などと呼ばれるものの、本来の意味からすれば、間違った使い方である。

辞典などには、「玉」とは立派で美しい寶石とあり、また、「輿」は屋形に身分の高い人に乗せ、それを担いで運ぶ乗物だとしていて、「玉の輿に乗る」とは、貴人の立派な輿に乗るというのが、元々の意味とある。

そして、それと共に記載があった、「女は氏なくて玉の輿に乗る」という言葉は、女性が低い身分に生まれても、容姿が美しさであれば、富や地位のある者に愛され、高位にのぼることができるとも書かれている。

ただ、現在のニュアンスとは違って、愛され結婚するのは同じだが、昔は身分が高い人で今は金持ちが対象だが、玉の輿に乗る目的は、昔は出世で今は自分も裕福な立場になるのだ、といえるのだろうか。

それにしても、この言葉がなぜ今に残るのかと思つて、色々調べてみると、実は、京都市北区にある「今宮神社」の別名が、「玉の輿神社」といい、良縁開運を願う、多くの女性が訪ねるといふ事が分つた。

そこで、楼門をくぐりぬけ、木立に囲まれた今宮神社を訪れ境内を進んでいくと、やがて石造りのレリーフがあり、そこに、銅板に描かれた「桂昌院（お玉の方）」の顔がはめ込まれていて、その下には、神社と桂昌院の縁を記す説明文がある。

それによれば、この桂昌院は江戸前期の寛永年間、この神社の氏子地域である西陣にあった、八百屋の次女として生まれ名は「玉」といい、その後、大店の養女となり、仕えた

関白家の鷹司孝子が、時の將軍家光に嫁入りするのに伴はれ、江戸城の大奥へ入った。そして、家光の側室となり「綱吉」を出産し、將軍の生母として「お玉の方」と呼ばれて華やぎの時を過ごしたが、とりわけ、故郷の西陣で荒廃していた今宮神社の再興に尽して、「一介の市井人から身を起こしながら、『玉の輿』を上り詰めた、類いまれな女性として、その生涯を偲び慕う人も少なくない」と、説明文は結んでいる。

八百屋の娘から、女性の頂点を極めた「お玉さん」だが、名前が輿を飾った宝石と同じだし、出世の経緯もまさにぴったりで、江戸時代の人達が、「玉の輿に乗る」とうのは、「お玉さんの出世」と捉えたとしても、不思議ではないだろうし、それに、お玉さんの物語が、この言葉を広めたという、側面もあったのではないかと思はれる。

その「玉の輿」は、明治時代に改めて脚光を浴びるが、それは、京都祇園で芸妓をして

いた「お雪さん」が、明治三十七年（一九〇四年）、米国大富豪のモルガン氏が、多額の落籍料を払い結婚し話題になり、結婚した日は「お玉の輿の日」となったが、令和の時代に、そんな女性は果しているのだろうか。

令和二年十月